

「春こがれ」

坂本梓

2024年8月9日朝、のと里山道路はジェットコースターのようなようだった。すれ違うのは工事車両に自衛隊車両。すべて復旧・復興に関わるものだった。「徳島」ナンバーの車は私の家族のだけ。もちろん、宿泊先などない。しかし、元日の震災から8ヶ月後の様子を自分の目で見ておくべきだと考えていた私は、家族に頼んで前日の夜から車で輪島まで走ってもらった。私は眠っていたけれども、父は片道10時間を休憩しながら走りきってくれた。

記憶が正しければ、朝市があったはずのところに到着したはずだ。しかし、見れば見るほど教科書に載っている「戦後の焼け野原」の様子でしかない。規制線が張られていて跡地を歩くことはできなかったけれども、テープ沿いを少し歩いてみた。まだ焼け焦げた匂いがかすかに漂ってくる。『ここで沢山の命が失われたんだ』そういう思いがどこからともなく湧いてきて、気がついたら手を合わせていた。家族も同じだった。そこから震災の象徴ともいえる「五嶋屋ビル」に向かった。道路に半分はみだすように、文字通り根こそぎ倒れている姿があった。隣家の人々が押しつぶされて、ここでも亡くなっている。お供えが倒壊したビルと家との隙間におかれており、祭壇のようにも見えた。無念、という声が聞こえてくるかのようだった。その周りの道もうねっていて、地面が蒨蒨のようにゆれたのだろうということが推察された。

陸上競技場であった場所には仮設住宅が建ち並んでいた。隣接している「キリコ会館」は遠目には被害がなさそうであったが、近づいてみると入り口は浮き上がり、ガラスが割れて散乱したままだった。そこに人影はない。いつもならば夏祭りの準備に忙しいはずの場所なのにひっそりとしていた。また、一隅には仮設の入浴施設もあった。それは道の駅の駐車場であったはずのところだ。そして、悲しいことにゴミ箱からあふれだしているゴミども。誰が使っているのかは分からないが、少なくとも被害が甚大であるの是一目瞭然。それなのにインフラが整っていると勘違いしているのだろう。ゴミ収集など来るはずもないのに、ゴミ捨てという日常的な行為がそこに残されていた。

和倉温泉にも立ち寄ったが、こちらでもまた温泉街崩壊、という言葉しか浮かんでこなかった。ビルのような温泉宿がまっぶたつに割れていたり、外壁が崩れていたり、その間にある住宅街が倒壊していたりと無残である。痛い、痛い、という感情しか湧いてこなかった。こういう旅になることは分かっていたが、それでも鈍痛が私を襲い続けた。

この旅は、ついで、が多かった。和倉温泉から氷見を抜け、富山、新潟、福島を経て山形の新庄市まで足を伸ばしたのだ。そこで見たのは能登と同じように山が崩れた様子だった。田畑も土石流によって埋まっていた。裏山がいまにも郵便局を飲み込もうかとしていた。そして、民家の二階まで土砂がやってきたのだろう跡もみえた。ただ、能登よりは日常が戻ってきているようにも見えた。こちらは地震ではなく雨による被害である。ただ、その時は能登が同じような雨による災害まで引き受けることになるという想像はできな

った。

帰宅した私は写真展を文化祭で開いた。新聞に記事を書いて校内に掲示もした。そうして知ってもらうことで、風化させないような行動を開始したのだ。

2024年11月23日、再び能登へ。和倉温泉の被害状況は変わらなかったけれども、それでも「総湯」は朝から盛況だった。雨の中、地元の方々だけではなく、観光らしい人も少し増えていた。輪島は地震に豪雨にと被害が続いたが、それでも地元スーパーの広く開いていた通路に出張朝市がたっていた。午前中には着いたのだが、もうすぐ昼になるという頃でもあったため、朝市は終わっており、完売、という看板もたっていた。『少しは復活してきたのではないか』という気持ちになり、のぞいた元朝市通り。相変わらず規制線があったが、焼け残った建物がほぼなくなっていた。ただ、基礎部分は残されており、立て直しをしていくまでにはまだ時間がかかるという状態だった。そんな様子をみている今日、雨が降っていた。涙雨なのかもしれない。その雨の中、歩き回っていると、五嶋屋跡地にたどり着いた。重機が4台ほどならんで、8月には原型のままであったのに半分くらいがなくなっていた。ちょうど昼休憩に入ったのか、重機は動きをとめ、タンクローリーが給油を始めた。そして、隣の生命保険会社ビルはそのままであったけれども、その奥に広がっている住宅地の一部に新築の家屋が数軒あるのが見えた。地元に残って生きていくという覚悟が見えた。

誰かに助けてもらわないとどうにもできない。支援してもらえないと前に進めない。それは確かにそうかもしれない。ただ、誰かに頼りっきりではなく、自らの力で立ち直っていかうという機運が出てくることが本当の復興に繋がっていくのだらうと新築のすっくと立った姿から感じられた。

今回は珠洲市まで足をのばした。8月には行けなかった場所だ。うねった道を上下左右乗り越えてたどり着いた能登半島先端の緑剛崎灯台。能登半島最先端という標識とともに東京まで302 km、釜山まで783 km、ウラジオストックまで772 kmという看板もあった。朝焼けが町を照らす、そんな日常が当たり前のように進んでいくのがとても貴重なのだ。狼煙という地域なのだが、ここはまだ被害がそのまま残っているとしかいいようがない。家屋の中に車を取り残されたままであり、土砂に埋まった田畑も多く、山崩れ、道路崩壊など復興に入っている重機すら見かけないような状態だ。一体いつになったら元にもどるのか。それとも見捨てられてしまうのか。しかし、そこで営業している緑光旅館の人々は温かかった。アレルギー持ちの私には素材集めにも苦労しているはずなのに、ちゃんと対応してくれていた。部屋に上がる階段にはひびがはいったまま。外壁も崩れ、鉄骨で応急処置がされ、ブルーシートも張られたまま。大広間ですら大漁旗のかかる壁の崩れがめだった。そんな状況でも通常通り営業をしている。工事関係者というよりは観光して少しでも助けたい、といった人が集まっているようでもあった。そして、驚いたことにアメリカなどからもやってきている人たちがいた。みんな地元食材に舌鼓をうっていた。ゆったりとした時間がながれていた。周囲に目をやると震災の爪痕が飛び込んでくるのに。

私は新聞で、写真で、校内や社会に向かって情報を提供し続ける。それくらいしかできないからだ。能登はもちろん、北陸のパンフレットを学校に持ち帰って、紹介するコーナーを作った。今でもみんなの目につくところに設置している。そして、この春、三度目の訪問を計画している。高校生である間に新聞や写真を通して、変化の様子を知らせていきたいと決めたからだ。誰かがやってくれるはず。何か出来ないだろうか。そんな他人事ではなく、今すぐにでも出来ることをやれる範囲でしていくのだ。

自然災害はいつ、どこで、だれにふりかかってくるか分からない。戦争もなくなっていない。そんな時代に私は平穏無事、やすらぎ、ということを意識して、出来る活動をしていくことこそ未来の「平和」に繋がると考えている。お金のある人はお金で支援するというのでもかまわない。誰もが大金を寄付できるわけではない。何をしたら優れているということでもない。できることは誰にでもある。それを理解して、自分の手の届く範囲で「平和」に向けて行動をしていくのがよい。

さあ、始めよう。